先輩たちの「おあしす米」があったから
私たちは就農に踏み切れた

小さい農家だからこそ感じる農業の醍醐味

熊本県南阿蘇村O2ファーム
大津愛梨

私も息子も泥だらけ

おいしい、あんぜん、しんせん、すてきなお米づくり

九州の真ん中。阿蘇山の麓にひろがる南阿蘇村で二〇軒の農家がつくる「おあしす米」。おいしい、あんぜん、しんせん、すてきの頭文字をとった名前です。アイガモかコイを田んぼに入れることで農薬を使わずに育てたお米の値段は、白米五kg三三〇〇円、玄米なら五kg二八〇〇円。値段だけ見るとスーパーなどで安く売られているお米の倍近い場合もありますが、つくるときの手間に加えて収穫後の乾燥から脱穀、保存、精米、袋詰めまでをすべて自分たちでやっていますので、だいぶ手間をかけています。それでも無農薬米としては比較的安い価格だそうで、それは精米機や袋詰めの機械を組合で持っているからこそできること。店やレストランなどには販売せず、全国八〇〇戸のご家庭にお届けしています。

おあしす米生産者組合が誕生したのは二〇年近くも前。いまでこそ無農薬も産直もめずらしくなくなりましたが、当時としては本当に時代の先を行く取り組みだったのだろうと思います。当時のエピソードを、リーダーに聞いた話をもとにご紹介します。

もとはといえば、JAの青壮年部の活動がきっかけとなって誕生したおあしす米。平成元年に「無農薬で米をつくってみよう」と立ち上がった農家は七名でした。一年目は一〇アールの田んぼで共同作業による試作。しかし田んぼは草だらけ、収量は通常の半分と、悲惨な結果でした。二年目は努力のかいあって何とか稲作らしくなり、収量も従来の八割程度に上がりました。

「これならいける、次は産直だ」「オリジナルの米の名前を考えよう」ということになり、水の生まれる里にちなんで「オアシス」と命名。売ることは決めたのですが、精米は？　袋は？　箱は？　資金は？　ないものずくめの状態でした。夜、近所のコイン精米機で、手分けしての精米。量りは持ち寄ったお粗末な台量り、袋は既製品の一番安いもの、箱は余り物。これでは売れるものも売れません。お金はとれずとも、まずは食べてもらおう、ということで、親戚や友人、そして知人たちに無料で試食米を送りました。米がおいしかったのか、それともかわいそうだと思われたのか、とにかく数人のお客様が買ってくれることになったのです。

見学に来たお客様に精米の工程を説明

どうにかそれなりのものができたことで賛同する農家がポツポツと現れ始め、生産者の数は二〇軒にまで増えました。そして紹介や口コミ、ホームページなどによるPRのおかげで年を追うごとにお客様の数も増え続け、ここまで成長したのです。

農薬や化学肥料を使わない農業をするなら、エネルギー（燃料）のことも考えよう、ということで、三年前には滋賀県愛東町へ「菜の花プロジェクト」を視察に行きました。ナタネを植えて

油を搾り、天ぷら油として使った後に回収して、軽油の代わりになる燃料として再利用するという取組みを視るためです。これなら自分たちが使う燃料を自分たちでつくることができるかもしれない。そんな思いで、二年前からナタネの栽培も始めています。ただ、田んぼにナタネを植えると、ナタネが熟すより前に田植えが始まってしまうことから、いまだに収穫に至っていませんが、村もようやく腰を上げた模様。耕作放棄地や休耕田で栽培すれば来年あたりからは収穫できるのではないかと期待しているところです。つねに前向きな姿勢をもち続けるおあしす米生産者組合の面々。私たち夫婦はそんな彼らがいたからこそ、就農に踏み切ったと言っても過言ではないでしょう。初の「おあしす二世代目」誕生です。

百笑生活五年目 O2ファーム

東京の大学を卒業した後、そろってドイツに留学した夫と私。専門は農村計画でした。帰国していったん東京で仕事に就きましたが、気づいてみると一日に一度も土を踏まない生活。農業や農村の将来を考えたいのに、こんな生活では何にも貢献できないとの思いは日々強くなるばかりでした。「どうせやるなら二十代のうちに」と考えていたものの、なかなか決断できずに顔つきまで暗くなりかけていた夫の背中をドンと押し、専業農家をしている彼の叔父を頼って見習いから農業を始めることしたのは五年前のこと。

田んぼにアイガモを放す

まわりからは「一〇年くらい東京で人脈をつくってからにすれば」とか「農業では食っていけないぞ」などと反対の声もあり、また、両親の住む東京を離れるのは寂しかったものの、「ドイツよりはずっと近い」と思うことに。何より、私の脳裏には何度か遊びに行ったときに見た、雄大な阿蘇の景色が目に焼きついていました。あんなところに住めるなんて！　不安よりも期待でいっぱい。こうして私たちの「百姓」ならぬ「百笑」生活が始まったのです。

中干し前にコイをいったん田んぼから上げる。夫は「恋つかみ」とかけて、女性向けのイベントにできないかと考えている

叔父の農場は、米とキュウリと阿蘇特産のあか牛を組み合わせた複合経営。農業に関する知識も経験もなかった私たちが今日までめげずに続けてこられたのは、何といっても叔父という強い味方がいたから。そしてその叔父が「おあしす米」という農薬を使わないお米をつくっていたからこそ、「私たちもやってみたい」と思えたのです。

いま、私たちは自分たちの選択がまちがっていなかったことに自信をもっています。農業は想像していた以上に楽しい仕事だし、また想像していた以上に大切な仕事。ではいったいどんなふうに楽しいのか、ちょっとご紹介したいと思います。

消費者の顔が見えるということ

最近、「顔の見える生産者」ということで、パッケージに顔写真が張ってあったり、生産履歴がわかるように工夫されていたりする農産物を見かけるようになりました。こうした努力によって、「誰がどのようにつくったのかがわかる」農産物が増えています。もちろん、安いという理由でどこの誰がどのようにつくったのかわからないものを買われる方もたくさんいらっしゃいます。それをどうこう言う気はありませんが、少なくとも「知りたい」と思う人が選んで買える機会が増えたことはよかったのではないでしょうか。

ただ、見方を変えると、「顔の見える生産者」というのは一方的な面があるように思います。つまり、消費者だけが生産者のことを知っているということです。生産者はただつくるばかりでどこの誰にどのように食べてもらっ

ているかが分からない。農業も産業なので、ある意味で仕方がないことなのかもしれませんが、私自身はおあしす米の産直を通じて、知っている人に食べていただけることをとても幸せに感じています。

就農直後、農作業もろくに覚えないうちから、お客様とのやりとりが始まりました。おあしす米は、月に一度、精米したてのお米を袋詰めしてお客様にお届けします。季節の野菜などをおまけに入れることもありますが、一番大切にしているのは手紙。一カ月の間にわが家や村で起きたこと、イネのようすなどを通信にまとめ、最後に一言手書きでメッセージを加えます。すると、お客様のほうからも振込用紙の通信欄にいろいろとコメントを書いてくださいます。「いつもありがとうございます」「台風大丈夫でしたか?」「米ぬかを分けていただけませんか」といったメッセージのほか、「受験生の息子に夜食のおにぎりをつくっています」とか、「ひどかったアレルギーがよくなってきたみたいです」といったメッセージ、そして何よりも嬉しいのが「おいしいです」のひと言。実際に会ったことがないお客様でも、定期的にこうしたやりとりをしていると、前から知っている友人のように思えてきます。夫とともに箱詰めの作業をしながら、「○○さん、転職したらしいよ」とか「△△さんのところはお孫さんができたんだって」などとお客様の話をします。

アイガモ見学ツアーと大バーベキュー大会

いくら選んだ職業だといっても、農業をとりまく環境はとてもきびしいし、日々の農作業をキツイと感じることだってあります。そんななか、「あぁ、あの人に食べてもらうんだからがんばろう」という、そんな思いが支えになるのです。誰が食べているか分かるから、より愛情をこめてつくることができる。一方的ではなく、持ちつ持たれつの関係に大きな魅力を感じています。

実際にお客様の顔を見る機会もあります。「アイガモ見学ツアーと大バーベキュー大会」は、毎年恒例となっている消費者との交流イベント。遠方からはなかなか参加していただけないのが残念ですが、熊本県内だけでなく九州一円から、そして飛行機で来てくださる方もいらっしゃるほど、けっこう人気の催しです。田んぼで活躍しているアイガモたちをお客様に見ていただいたあと、生産者とそれぞれのお客様がテーブルを囲んで阿蘇特産のあか牛に舌鼓を打ちます。「おあしす米の歌」を披露したり、子どもたちが喜ぶビンゴゲームがあったりと余興も盛りだくさん。昨年は俳優の永島敏行さんや県知事、村長さんまで参加してくださり、おおいに盛り上がりました。

このようにお客様と直接交流することで、お客様にも親近感をもっていただき、私たちも元気をいただく。農業という、なかなか目につきにくい仕事が、やりがいのある仕事に変わる。それが「顔の見える生産者」と「顔の見える消費者」の関係なのだと思います。

おあしす米生産者組合が無農薬のお米をつくっている面積は約二〇ヘクタールもありますが、一軒の農家は一番大きいところでも三ヘクタール強程度です。お米だけの専業農家はほとんどいません。メロン、イチゴ、トマト、大豆、キュウリなど、みんなそれぞれほかの作物もつくっていたり、ほかの仕事もしていたり。このようにいろいろな経営をしている農家が集まって「おあしす米」をつくっているのです。

一軒の農家で何百軒ものお客様に送っていては、双方向の関係を築くのは無理でしょう。そんなにたくさんのお客さんのことを覚えることはできませんから。でも、小さな農家が一軒で無農薬米や産直をするのも大変なこと。小さな農家が寄り集まることで、大きな農家のような効果を上げるという「おあしす米」のやり方は、絵本の「スイミー」みたいなものかな、と思います。ご存知ですか? 小さな魚が集まって大きな魚に見せかけ、本物の大きい魚に立ち向かうという「小さなかしこいさかなのはなし」です。

小さな農家の強み

お客様との直接のやり取りによる喜びに加え、農作物の成長を見る楽しみや収穫の喜びももちろんありますし、農作業や農村の暮らしのなかにも驚きや感動がたくさんあります。

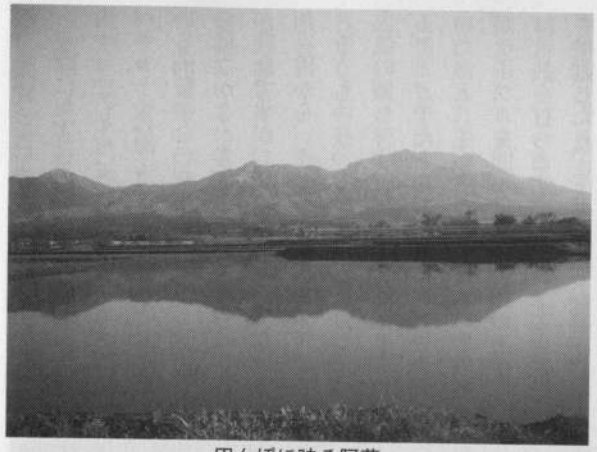
まずは、何といっても安全性のこと。農薬や化学肥料を使っていないので、つくっている私たちにとっても安全です。一歳半になったわが家の子どもたち（双子です）も、田んぼが大好き。ずぶずぶと入っていっては、代かきや雑草取りの手伝い（?）をしています。泥だらけになった子どもたちを見て、近所の人たちは呆れ顔。でも泥遊びって本当に楽しいようで、子どもたちは

ご機嫌。そして田んぼの中に目をやると、カモやコイの他にもオタマジャクシやカエル、オケラ、タニシなど生き物がたくさん。東京で育った私にとっては考えられないような恵まれた環境で育っている子どもたちがうらやましいほどです。カエルにとっては災難ですが……。毎日アイガモのようすを見に行くのも楽しみ。

また、季節ごとに変わる美しい景色。とくにわが家のまわりにはさまざまな形の小さな田んぼが姿をとどめており、「田ごとの月」ならぬ「田ごとの阿蘇」を映し出しています。機械で作業することが多い叔父や夫にとっては効率が悪い面もあるようですが、形の違う小さな田んぼは風景としてじつに絵になります。それに思わぬ産物もあります。今年、わが家の庭や田んぼにはたくさんのホタルが舞いました。コンクリートで固めた水路には住めないホタル。近隣の集落で水路をコンクリートにしたため、わが家の周辺に集まってきているようす。去年よりずいぶん数が増えました。あぜ道に生えているヨモギやノビルを集めて、家で食卓にのせるのも楽しいものです。

近くにいるたくさんの「先生」たちも、私たちの支え。就農当時から、私たちが農作業をしているといろいろな人が声をかけてくれます。会社などでもいろいろ教えてくれる諸先輩はいると思いますが、農村の先輩方はなんといっても年期が違う。八〇歳を越えても現役で農作業に励んでいる方々がたくさんいるのですから！　昔の話を聞いたり、苦労話を聞いたりすると、勉強になることがたくさんあります。

同年代の仲間たちと開くホームパーティーも楽しみの一つ。満月を見ながらの一杯、竹を割っての流しそうめん、棚田の中にあるキュウリ畑で採りたてキュウリをかじりながらの飲み会……。地元でできた友人たちに加え、わが家には全国、いえ全世界からのお客さんがたくさん来ます。調子に乗って飲みすぎると翌日の作業に響きますが、ふだんあまり土に触れることがない友人たちが、わが家に来て農作業に参加してくれるのは、私たちにとっても、そして友人たちにとっても喜びな



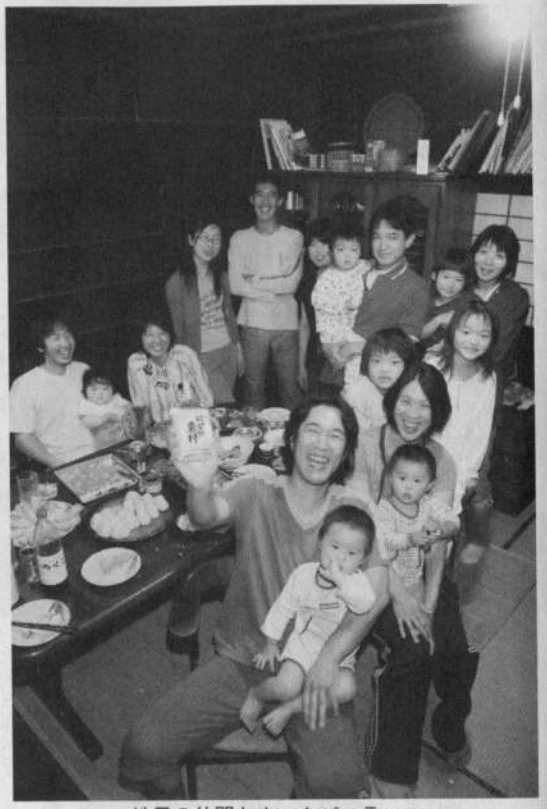
田んぼに映る阿蘇

のです。

こうして考えてみると、私たちに喜びを与えてくれている数々の要素は、大学院時代に「農村の多面的機能」として習ったことばかり。国土保全、景観保全、生物多様性の維持、水資源涵養、グリーンツーリズム……。むずかしい言葉が並んで、頭ではなんとなく理解したつもりでも実感がともなっていなかったあのころ。南阿蘇に住み始めて五年の月日が経った今、私たちの暮らしのなかで感じる喜び一つひとつが、農業や農村のもつ多面的な機能のおかげなんだなぁ、と感じることができます。

このような多くの幸せを感じることができることこそ、小さい農家の醍醐味！　規模を大きくすると見えにくいこと、感じにくいことが、小さいからこそ分かる。そんな気がしてなりません。より多くの農地を守るのは大規模な農家でしょう。しかし農村のよさや文化を守るのは、私たちのような小さな農家の集まりなのではないでしょうか。それこそが小さな農家の強み。友人や知人だけでなく、お米のお客様が自分のふるさとのように思ってくれる関係をめざしながら、強くて楽しい小さい農家でありたい。

「理想は『みんなの実家』かな」と、脇で夫がニコリとしながらつぶやいた。



地元の仲間とホームパーティー

■O2ファーム　〒八六九―一五〇一
熊本県阿蘇郡南阿蘇村両併五八九　電話・FAX〇九六七―六二―三七三〇
http://www.aso.ne.jp/~reisi/
エリの共同通信ファーマーズブログも週一回更新中
http://dandantanbo.kyodonews.jp/
■「白水　おあしす米のうた」が聴ける「あおしす米」ホームページ
http://www.aso.ne.jp/~oasys/